

---

# 機動戦士ガンダムOO 魔神Ζ

五月雨 東

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士ガンダムOO 魔神Ζ

### 【Zコード】

Z9592S

### 【作者名】

五月雨 東

### 【あらすじ】

西暦2307年、日本の町でミツル・兜は祖父と弟と平穏に暮らしていた。

しかしそこへテロリストが町を襲撃してしまつ、ミツルは家の地下に避難するとそこにはMSとは程遠い形状のロボットがあつた。その名はマジンガー。

彼は神にも悪魔にもなれるその力をふるい、世界を奔走する。

## 人物とロボット設定（前書き）

登場人物設定です。

## 人物とロボット設定

### 人物設定

ミツル・兜かぶと

16歳。この物語の主人公、よく町中や士官学校で喧嘩をしていたが音は優しい人間。努力家でもある。

弟のレンと祖父の長十郎と平穏な日々を送っていたがひょんなことから祖父は失踪、祖父の遺したマジンガーノに乗り、世界を混乱させるテロリストと戦う。

かおり・弓

ヒロイン。士官学校の優等生で日々喧嘩ばかりしているミツルにく注意する。

父はC.Bの協力者である。

レン・兜

ミツルの弟、喧嘩ばかりしているがかなりの努力家である兄を尊敬している。

長十郎・兜

ミツルとレンの祖父、形相は凶悪だが孫を愛するおじいちゃん、ミツルにマジンガーノを託したあと消息を絶つ。

ロボット設定

ホバー・パイルダ

マジンガーノを操縦する小型のホバークラフト。

## マジンガーン

長十郎・兜が造り上げたスーパー・ロボット。全体24m、重量32t。機体の性能はガンダムの十数倍である。光子力エンジンで動いている。装甲は超合金<sup>7</sup>という合金である。ガンダム一ウム合金の数百倍の耐性であり、鉄壁の防御力を誇る。自我が宿っているようで、ミツルがピンチの時に自動でやつてくることもある、パイルダも同様。自己再生、自己修復を補つてあり、数時間が立てば完全回復も可能。

### 武器

#### ロケットパンチ

マジンガーンの代名詞ともいえる武器、マッハ<sup>9</sup>の速度で飛行し、ガンダムをも簡単に貫く。指からのショット噴射で再度戻る。

#### ブレストファイヤー

胸の放熱板から十五万度の熱線で相手の機体を溶解する。

#### ルストカリケーン

口のスリットから強酸の混じった強風を出し、相手を銷び朽ちつかせる。超合金<sup>7</sup>をも銷びつかせる。ガンダム相手でも機体の全体7割の装甲減少は免れない。

#### 光子力ビーム

マジンガーンの両目から放つ破壊光線。ブレストファイヤーを凌駕する火力を持つている。

#### マジンパワー

マジンガーンのパワーを通常の5倍にさせるマジンガーンの切り札。ただし今のところミツルしか使用できないうらしい。

## ジェットスクランダー

マジンガーZが飛行戦闘を行つよう開発された兵器、マジンガーゾと合体し、マッハ9のスピードで大空を飛ぶ。この兵器も超合金Z製。

## 人物とロボット設定（後書き）

マジンガーZが好きでガンダムの世界へと出してしました。原作よりはるかに強化されているマジンガー、なぜならかなり強化しないと生き残れないからです。主人公をあまり人殺しさせないように努力しておきます。当然そのためにオリジナル話をさせていく予定です。第一話は5月6日からです。

## 第一話 その名はマジンガー（前書き）

機動戦士ガンダムOO 魔神Z 始まります

## 第一話　その名はマジンガー

日本

朝である。

ここ日本の町にはなんの変哲もない朝。しかし世界には戦争や紛争が勃発しているのである。ここはまさに世界の中でも数少ない平和な町である。

その町に建てられている一軒の家、そこには3人の民間人が住んでおりました。その家族たちが後の世界を大きく動かす人たちだとも知らずに。

長十郎「おはようー！」

部屋のドアから左目が失明しており傷跡がある老人が急に顔を出してきた。

レン「うわあーーー！」

その家族たるこの家の少年レンは驚いた。

長十郎「ん?どうしたレン?」

レン「もうーいきなり顔を出さないでよーおじいちゃんの顔、おつかねえんだからー！」

長十郎「すまん、すまん、レン。確かに朝一番に見る顔じゃないわな！」

レン「いやあ、つこ本郷の事話つけられて……すまねえ。」

するヒレンの兄であるひつ青年が声をかける。

ミツル「ひひー・酷い言い方するんじやないー・レンー誰のおかげで朝飯が食えると思ってるんだ!」

レン「ゴメンー・ゴメンー・兄貴の前じゃおじこぢやんの顔の事は御法度だつたぜ」

長十郎「はっせつめー・よこよこ。それに朝飯が食えるのはミツルが作ってくれる料理のおかげじゃしなー」

ミツル「まあ、それほどでもないかな?」

長十郎「だからつてお嫁にはいかないで。」

レン「おじいちゃんそれ速。」

はははははーーー

レン「うちは平和だね。ソレスターなんたらつてのが宣戦布告したつてのが嘘みたいだよ。」

ミツル「確かに、普通じゃない。アレは冗談かもしけない。それこそ神か悪魔じやなきや無理な話や。」

長十郎「神か悪魔か……」

ミツル「ああ、早く朝飯をくつちまおつぜ、学校に送れちまつ。」

レン「そつだ！昨日の光子力の実験のニコースを見なきやー。」

レンはテレビをつけた。

「ニコースキャスター」「うんぐだわい成功です！実験は見事に成功しました！」

長十郎「・・・」

「ニコースキャスター」「これが次世代のエネルギー、光子力実用化に向けての第一歩であります。」

長十郎「莫迦めが。」

ミツル「何か言つたか、おじいちゃん？」

長十郎「いや、何でもない、朝飯」「ちそつさん。そつだ、ミツル、レン今日は早く帰つてくれんか？少し話があるんでな。」

ミツル「話？」

長十郎「頼むぞ。」

長十郎は部屋に出た。

ミツル「おじいちゃん？」

レン「どうせ新しいバイクでも買つてHンジンでも改造するつて話  
じゃないの？」

ミツル「それにしてやなんか深刻な雰囲気だった。」

レン「氣のせいだよわひと。それが研究がちょっと行き詰ったんじやないの？」

ミツル「かもな、おじこちやんらしくな。」

レン「さすが元有名科学者だね。」

ミツル「おかげでうちには発売の特権でこくらかお金をもらつてこむ。」

レン「でもほととど新しい研究費に消えりやうなんてもつたいないよ。」

ミツル「ああ。・・・また何かやつてるらしくけど、研究室に入れてもうえない。研究所で志望した親父たちのよつてな。」

レン「でも俺たち氣にしてないのにね。」

ミツル「ああ。それにおじこちやんことわやお金は遊びや贅沢のためにあるんじゃねえ。なにかすぐえ新発明をするためにあるんだ。すばらしくかつこいいおじこちやんだぜ！俺は大好きやー！」

レン「ああー俺もー！」

ミツル「ああ、学校へ行くか！今日は寄り道なしで帰るや。」

とある高原

「C.B.」には所属していないテロリストたちはある町を田指していた。MSはおよそ15機

テロリスト1 「われわれはこれより光子力の襲撃に入る。あの力を使い、ガンダムと互角に渡り合えることができる。」

テロリスト2 「研究所の周辺の町は dizします。」

テロリスト1 「もちろん襲撃する。もともとの任務は町を破壊する作戦でもあるからな。」

テロリストたち 「了解。」

士官学校のグラウンド

???? 「よお兜、どうだい調子は?」

ミツル 「ヤニヤニ」。そっちはどうだ?」  
ミツル 「ヤニヤニ」。

ボス 「ククク・・・。」

ボスは今でも何かを企まんといつ顔で笑っていた。

ボス 「兜、俺は一世一代の告白に出るー。」

ミツル「一世一代の~~サムライ~~？」

ボス「やつ。隣のクラスのマドンナかおじちゃんに告白するのよ。」  
はん

かおりちゃんとは言つたとおり隣のクラスのマドンナだ  
美人であり成績優秀。誰もが憧れをもつている少女である。

ミツル（なるほど、確かにこのボスも見とれるのも無理も無い。）  
「じゃあ頑張りなよ。」

ボス「ああっ！てめえ今絶対に失敗するって思つてただろう！…？」

ミツル「いやいやいや…思つてねえって！」

ボス「よつこー表に出やがれ！その根性たたきなおしてくれー。」

ミツル「いいぜー！うつ体がなまつたといふだー。」

ボカ！バキ！

士官学校から激しい殴り合ひが続いていた。

そして下校時刻

ミツル「あーて帰るか。」

顔が痣だけのミツルは愛機のバイクで家に一直線に走る。

ミツルとレンは家の玄関に入つていぐ。

ミツル「ただいま。あれ？おじいちゃんいないの？」

レン「いや畠寝しているだけなんじゃないの？」

ミツル達は祖父長十郎の名前を家で呼び続けていた。しかし長十郎の姿はどこにもいなかつた。

しかし・・・・・

レン「あ・・・兄貴……」の階段・・・

レンはリビングで地下室につながる階段らしきものを見つけた。

ミツル「あれ? ここは、おじいちゃんがいるのか・・・」

レン「兎に角行つてみよ!」

ミツルとレンは地下室につながる階段を下つていぐ。

兜家地下室

ミツルとレンは地下室のドアを開けた。するとそこには、全長20mの更迭の巨人が立つていた。

レン「なんだこれ？ 悪魔・・・？」

ミツル（いや違つ・・・）「これは神だ！俺にはわかるんだ。そういうおじいちゃんの部屋にはギリシャ神話の本がよく飾られていた。子供のころの俺はその本が好きでよく読んでいた。そして目の前に

いぬ」の巨人はあの本に出ていた金色の神に似ているんだ。）

その時である。ズズン！と轟音がした。

町

テロリストたちは光子力研究所に向かつて町を破壊していた。にげまどう住民、破壊を楽しむテロリスト、崩壊するビル・・・・今までの平和が嘘のようだった。

テロリスト1「いのまま直行。目標光子力研究所・・・・。」

テロリスト2「リーダー、向こうの家の中から何かが出ます！」

テロリスト1「何？回線をつなげ！」

テロリストのリーダーはモニターの回線をつないだ。

モニターの中には空にそびえる鉄の城が堂々と突っ立っていた。

4分前

ミツル「えーとこのホバー・パイルダ でのロボットと合体すればいいわけだな。」

レン「本当にうまくいくのかなあ。」

ミツルとレンはホバー・パイルダ に乗っていた。レンはパイルダの後に座つてミツルがパイルダ を動かしている。

ミツル「でもどうやってやるん?」

パイルダーオン。

突如パイルダ のモニターに画面が流れた。  
それは文字だらけだった。

マジンガーノとトッキングの仕方。

ただパイルダ オン!とさけべばいい。

ミツル「至極単純だな。よしパイルダアアアアアア  
ン!!」

ホバー・パイルダ の翼は折り、鋼鉄の巨人の頭部に見事トッキング  
した。

神にも悪魔にもなれる力

その名も・・・

その名も・・・

その名も・・・

エト!!

マジンガアアアアアアアアアアアアアア

そして今に至る。

テロリスト「なんだあのMSは見たことがない！新型か…？」

テロリストたちは驚愕していた。突如家中から見たことのないロボットが現れたのだから。

レン「ま・・・町が・・・」

ミツル「ひでえ・・・」

町はボロボロだった。今まで空気がきれいで住みやすく、居心地のいい街が一瞬で破壊されてしまった。

ミツル「おい！てめえらーそこまでしてこいつする理由なんてあるのかよ！！」

ミツルは憤慨しながら言つ。

テロリスト「黙れ！！光子力を奪取するためには我々テロリストたちの悲願達成だ！！謎のエネルギー光子力、それを利用すれば我々は神に近い存在になる。」

ミツル「神に近い存在だと・・・じゃあテメら、神に近い存在になる前にこのマジンガーZを倒してきやがれ！！」

テロリスト「面白い、望み通りにしてやる、撃てい！！！」

15機のMS達はマシンガンやビームライフルでマジンガーZに集中砲火を浴びせる。爆風の音がする。たとえGNフィールドがないガンダムでもひとたまりもないだろ？。テロリスト達はさすがに落

ちたと思つただろ？。しかし・・・。

ミツル「すげえ、外傷はひとつもない。」

マジンガーZは無傷だった。あれほどの中砲火を浴びても傷一つないMSなんて数少ない。

テロリスト1「そんなバカな！…どうして・・・何故！？」

テロリスト2「リーダー！…もう全機弾切れです！」

絶対絶命。

さっきまでは町を破壊し尽くしたテロリスト達がロボット1体も傷をつけられない。そしてあの鉄の城の戦闘能力はガンダムをこえるだろう。テロリスト達は体の震えが止まらなかつた。

あらゆる攻撃から身を守る鋼鉄の壁。

10000の敵に囮まれようとも傷一つない鉄壁の合金。

その名も超合金Z。

ミツル「いくぜ！テロリスト共！」

レン「兄貴、操縦の仕方わかつてゐのか！？」

ミツル「ああ。感覚でわかる。行くぜ！！」

マジンガーZは攻撃態勢に入る。

全てを貫く正義の拳。

その名も！

その名も！

その名も！

ミツル「ロケットオオオオオオパアアアアアアンチー！」

マジンガーZから鋼鉄の拳がジェットのように放たれる。

その拳をくらつたテロリストのリーダーのMSは見事貫かれ・・・  
撃墜された。

テロリスト2「リーダーが一瞬で・・・」

テロリスト3「悪魔だ・・・悪魔のロボットだ！！」

ミツル「ああ！まだやるのかテメHらー！」

テロリスト2「て・・・撤退！！」

ドオオオン！！

テロリスト達が撤退しようとした時だった。どこからか砲撃がした。

？？？「狙い撃つたぜ。テロリスト共。」

マジンガーZの後方に緑のガンダムらしき機体がみえる。

ミツルは気がつくとマジンガーZの前にガンダム3機が舞い降りていた。

ティエリア「こちらC Bだ。<sup>ソレ・スター・ビー・イング</sup>マジンガー、およびその操縦者、君たちに話がある。」

続く

第一話 その名はマジンガーナ（後書き）

次回「C.B」

## 第一話 C B

ミツルがマジンガーZで敵と戦つてから2時間後  
バードス島

バードス島のある部屋ではいかにもセレブがいそうな豪華な部屋でソファーに座りながらマジンガーZの映像を見ていた女性がいた。その女性の年齢は30代後半だった。しかし誰しもが「本当に30代なのか?」と聞かれる美貌の持ち主だった。

「失礼しますD·r·アテナ。」

部屋のドアからノックの音が聞こえ、女性は静かにD·r·アテナと呼ばれる女性に声をかけた。

D·r·アテナ「手続きはすませておいたのエレガ大佐?」

エレガ「はい。戦力不足のテロリスト達や「コニオン」、「AEU」の上層部にタロス像と「機械獣」を送りつけました。その利益は我々の給料の百倍近くに及ぶでしょう。」

D·r·アテナ「御苦労さま。そういうえば貴方マジンガーZについて知つてる?」

エレガ「突如現れた謎のMSですか?」

D·r·アテナ「知ってるならば話は早いわ。あとマジンガーZの戦闘能力に思つたことはない?」

エレガ「MSの集中砲火を浴びても傷一つないボディと拳をマッハ9で飛ばす鉄拳。恐らく「CB」のガンダムに匹敵する戦闘能力かと・・・」

D・アテナ「ガンダム? あんなのマジンガーZにとっては雑兵程度にしかならないわ。」

エレガ「それほどの戦闘能力なのですか・・・」

D・アテナ「おそらくこの時代「CB」のガンダムとマジンガーZが動かすかもしれないわ。そして・・・あの子も・・・」

### 光子力研究所

ミツルとレンは謎のガンダム集団「CB」に連れられ、CBの協力者であり光子力研究所最高責任者であるD教授と面会することになった。

弓「君がミツル君とレン君かね?」

ミツル「はい、俺達は長十郎兜の孫であるミツル・兜です。」

レン「お・・・同じくレンです!」

弓「はつはつは。そう固くならなくともいいよレン君。確かに私は名を上げ過ぎてしまつたからね。」

ミツル「あの・・・光子力研究所つていいますけど、まさかマジンガーゾのエネルギーって・・・」

弓「そう。君の言う通りはマジンガーゾ光子力エネルギーを動力源としている。」

ミツル「でもなんでそのエネルギーをおじいちゃんが・・・」

弓「恐らく兜博士は我々のはるか先まで光子力を開発したのかもしれん。そしてこの地球前例のない『スーパー・ロボット』を作り上げた。」

ミツル「それが・・・マジンガーゾ・・・」

弓「マジンガーゾには超合金ゾの他にもまだ未知の力が隠されている。我々はマジンガーゾの解析に移るつもりだ。」

ミツル「あの・・・おじいちゃんとは知り合いだったんですか！？」

弓「うむ。あの人は私の師匠だ。兜博士は数十年前までは軍用兵器の開発をしていた。私はその助手だった。」

レン「MSとかを作っていたのかな。」

弓「その通り、しかし兜博士は「これ以上かたつ苦しい軍にはいられない」と言い出し兵器の開発から足を洗ってしまったのだよ。そして隠居して家族と暮らしていたとは・・・」

レン「そんなに凄かつたなんて・・・」

弓「所で兜博士は今元気かね？」

ミツル「自分にも分らないんです。昨日おじいちゃんは「早く帰つてこい」と俺たちに言いだして、いざ家に着いたらおじいちゃんは不在のままで、それで扉が開いたままの地下室をでたらマジンガーノを見つけて、町を襲撃したテロリストたちをマジンガーノで倒しましたです。」

弓「やはり家の地下で造っていたのか。テロリストといえどMSを一撃でなぎ倒す戦闘能力。このことは世界中にはれているかもしかん。」

ミツル「じゃあもしかして・・・」

弓「マジンガーノを狙う連中は世界中で現れるだろう。「ヨニオン」「AEU」などが妥当だろう。」

ミツル「マジンガーは・・・俺が守ります!!」

弓「分かった。だが今君はマジンガーノの操縦が完全にできとはいひない。ミツル君、レン君。マジンガーノの操縦が慣れるまでここで住宅してもらひ。」

ミツル「わかりました」教授。

光子力研究所 格納庫

ミツル達が弓「教授と会話している同じ時間に「CB」のガンダムマイスターである刹那・F・セイエイ、ロックオン・ストライス、テイエリア・アーデ、アレルヤ・ハプティズムは格納庫からマジンガ

一ノを見続けている。

刹那「これがマジンガーノ、神にも悪魔にもなれる力。」

ロックオン「全長はガンダムとほぼ変わらない。だが違うのはガンダムをも凌駕する圧倒的な火力と装甲。」

ティエリア「マジンガーノが起動したときウエーダにそれなりの影響を及ぼしている。」

アレルヤ「すごい機体だね。マジンガーノ。」

ティエリア「ミス・スマラギからの命令により光子力研究所の調査を頼まれた。弓教授とはイオリア氏とは学生時代先後輩の仲である。よつて光子力研究所には被害を加えない。だがもし光子力が軍事兵器の作成の動搖を見せた場合破壊する。」

ガンダムマイスターがマジンガーノを賛美している時だった。

ハロ「敵機接近、敵機接近！！」

ロックオン「何！？テロリスト達は俺たちが追い払ったはずだぞ！！」

アレルヤ「違う、これは・・・「AEU」だ！」

「AEU」のMS50機が光子力研究所を包囲している。

ティエリア「AEUが攻めてくるのもウエーダでも予想範囲内だ。」

弓「CBの諸君！」

弓教授が格納庫に駆け付けた。

弓「君たちはいつたん逃げるんだ。光子力研究所は一応武装してある。」

アレルヤ「でもいくら何でもあの数では・・・」

ロックオン「それに俺達も任務なんです。光子力研究所は俺たちが守ります。」

弓「・・・わかった。ただし無理はするな。」

刹那「了解、刹那・F・セイエイ。目標を駆逐する。」

光子力研究所 所長室

レン「あ・・・あの数のMSがこの研究所を包囲している。」

ミツル「レン、悪いがお前はここに残ってくれ。」

レン「兄貴はどうするの。」

ミツル「マジンガーZでのMS達を追い払う。」

光子力研究所外

AEU大尉「さて、来るなら来いCB、我々「AEU」の切り札を

見せてやる。」

地下には獰猛な機械の獣が待機していた。  
続く

第一話 C B (後書き)

次回「機械獣」

## 第三話 機械獣

昨日  
日本

A EUの基地にて

A EU大尉「機械獣？」

エレガ「その通り、A EUの協力者であるDr.アテナはこれ以上仲間が戦争の犠牲になるのは嘆かわしいとおっしゃられた。…そこでDr.アテナは古代ミケーネの遺産であるタロス神像と機械獣の改良と量産に成功したのだ。」

基地の格納庫には頭部に巨大な鎌を構えた、骸骨の顔を象った頭部をもつ機械獣、ガラダK7。

戦艦に匹敵する高出力のレーザーを放てる二つの首の機械獣、ダブルスM2。

上下に分離させた巨大な体の間に、強力な電磁網を放つ機械獣、ノナカーゴH2。

古代ミケーネの発掘などに大いに貢献したタロス神像。どれもMSを圧倒するパワーと耐久力を持っていた。

A EU大尉「しかし、無人機にどうやって指示しろというのですか？」

エレガ「その点なら心配ない。貴様にこれを渡そう。」

エレガはA EU大尉に黒い杖を渡した。

AEU大尉「これは杖?」

エレガ「そつ。」Jの杖は機械獣やタロス神像を操る事ができる。自分の意のままに。」

AEU大尉「自分の意のままに・・・」

エレガ「これならばガンダムと戦う時最低でも互角にわたれるだろう。」

AEU大尉「しかし神出鬼没のガンダムが何処に現れるか・・・」

エレガ「光子力研究所。」

AEU大尉「光子力研究所!?」

エレガ「貴様は知らんだろうが光子力研究所とCBは協力関係にある。あそこは潰す価値はある研究所だ。」

AEU大尉「しかし、今光子力研究所は世界でも注目されている研究所、実験の中でありますしそこを攻撃してしまっては・・・」

エレガ「問題はない。その時はドアテナがなんとかしてくれる。あの方はAEUやユニオンでもかなり顔がお広いお方だ。そしてAEUの上層部の命令もある。光子力研究所を潰すことにはな。」

AEU大尉「了解しました。命令とあらば我々は従うのみです。」

エレガ「おや、もう行くのか?」

AEU大尉「光子力研究所とCB、この二つの連携を許したら世界の脅威となりますので・・・」

エレガ「わかった。私もすぐここを離れるとしよう。」

AEU大尉「もう行つてしまつのでエレガ大佐。」

エレガ「まだ商談が残つてゐる、では失礼する。」

エレガ大佐はそう言つて基地を出て、飛行要塞グールに搭乗し空を飛び。

エレガ「この攻撃はCBの強さと機械獣の性能のテストでもある、いい結果を出せよAEU。」

そして今に至る

刹那「エクシア、目標を駆逐する。」

刹那のガンダム、エクシアは得意の白兵戦で次々と敵のMSを撃破する。

ロックオン「狙い撃つぜ。」

ロックオンのガンダム、デュナメスは得意の遠距離からのスナイパー・ライフルで、次々とMSを撃破する。

アレルヤ「ガンダムキュリオス、行くぞ！」  
ティエリア「GNバズーカ、セット。」

ティエリアのガンダム、ヴァーチュとアレルヤのガンダム、キュリオスも地味ながらMSを撃墜していく。もはやAEUの部隊の全滅も時間の問題だろう。

その頃、行動隊長のAEU大尉は遠くの山の頂上にいた。

AEU大尉「さすがガンダムといったところか。だがその優勢はいつまで保てるかな？」

AEUの大尉はエレガ大佐に渡された杖を掲げ、

AEU大尉「ゆけい！機械獣軍団よ！敵をせん滅せよ！」

杖から巨大な電光が放たれ、地面に衝突する。

そしてゴゴゴ……と地震が起きた。

ロックオン「何だこの地震は！？」

アレルヤ「地面から何かくる……」

地面からドパン！と体を出したのは、100体のタロス神像と3体の機械獣だった。

刹那「100機以上もあるだと！？」

ロックオン「ちつ！数がある！？」

AEU大尉「さあ行け機械獣軍団！進撃開始だ！」

タロス神像と機械獣達はガンダムに向かつて進撃を開始する。

ティエリア「まずい・・・光子力研究所に撤退するーー」

アレルヤ「了解。」

刹那「・・・」

しかし刹那はティエリアの命令を無視し、機械獣軍団に突撃した。

ティエリア「刹那・F・セイエイ・・・」

ロックオン「馬鹿野郎！死ぬ気か！？」

ロックオンも刹那を止めようと刹那の所へと向かう。

AEU大尉「攻撃せよ、ダブルスマッシュ！」

ダブルスマッシュ「グオオオオオオオオオオ！」

ダブルスマッシュはAEU大尉の命令を聞き、刹那のガンダムに向かつて、戦艦に匹敵する高出力レーザー砲を発射した。

刹那「GNフィールド！」

刹那のエクシアはGNフィールドを開いたが、そのビーム砲に耐えられず、エクシアの装甲に多大なダメージを負う。

ロックオン「刹那！」

刹那「問題ない。戦闘を続行する。」

ロックオンはデュメナスでダブルスマッシュを狙い撃とうとしたが、タロス神像にデュナメスの体を抑えられてしまった。

ロックオン「くそっ！動きを封じられた！？」

ガラダクフは一本の頭の鎌を取り出し、デュナメスの装甲を切り刻んでいく。

アレルヤ「くそ、援護す・・・」

アレルヤのキュリオスはノナカーゴH2の伸縮する電気網にかかってしまい、電流で身動きがとれなくなってしまった。

ティエリア「くそつ、これでは援護できない。」

ティエリアのヴァーチュも数10のタロス神像に囮まれてキリがない状態。」

4機のガンダムといえど機械獣軍団には歯が立たなかつた。

刹那「GNソード！」

エクシアはダブルスマッシュにGNソードできりかかる。しかし、ちょっと腹を切られた程度のダメージしかダブルスマッシュに与えられなかつた。

ダブルスマッシュはエクシアにビーム砲を発射する。

エクシアはGNフィールドでガードしたものの、貫通し、それをモ

口にくらつてしまつた。

刹那「俺は・・・ガンダムに・・・・・」

AEU大尉「さあダブルスマスM2よ、ガンダムに止めを・・・・・・

AEU大尉が「せせーー」と言おうとした時だつた。

「ロケットオオオオパアアアンンチーーー！」

突如マッハ9の黒い拳がダブルスマスM2の胸に貫通する。そしてダブルスマスM2は爆発して果てた。

AEU「な…何が・・・・・」

AEU大尉が遠くを望遠鏡で見ると、そこには無敵の魔神、マジンガーZの姿があつた。

ミツル「なんとか間に合つたみたいだな・・・・・」

刹那「ミツル・兜・・・・」

ミツルはマジンガーゼに搭乗していた。初めてあつたばかりなのに、協力関係である「CB」のガンダムマイスター達を見過すわけにはいかなかつた。

AEU大尉「何だ、あのMSは!?「CB」の新兵器か!?!」

AEU一等兵「大尉、あれは4時間前テロリストたちをおびえさせた「マジンガーZ」と言ひ機体です！！」

AEU「ちいっ！だがたかが一機に何ができる！タロス神像達よ、あの黒い機体を抑えつけろ！！」

タロス神像100体近くはマジンガーZに向かつて突撃する。

ミツル「いいぜ、てめえらにマジンガーの強さを見せてやるよ、うおおおおついやややややああああーー！」

マジンガーノはロケットパンチを使わず、格闘でタロス神像を粉々している。殴つて、蹴つて、そのパワーは世界中のMSのパワーを持つてもいやしないほどだった。

ティエリア「なんという・・・」

ロックオン「すげえ・・・」

AEU大尉「ならば機械獣ノナカーゴH2よ、あの機体を締めあげる。」

ノナカーゴH2はキュリオスの攻撃をやめ、両手の電気網でマジンガーZを締め上げた。マジンガーZに電流が走る。

ミツル「そんなもの・・・きくがああああああああああああーー！」  
だが全く平氣だつた。ガンダムをも戦闘不能にしてしまつ電流を流してもマジンガーZには全くの無害であつた。

ミツル「ブレストオ、ファイヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「！」

マジンガーZの胸の熱板から、巨大な一五〇〇〇度の熱光線が放出される。それはノナカーボンに直撃し、ノナカーボンは溶解した。

AEU大尉「ば・・・馬鹿な・・・そんな、ガンダムを圧倒する機械獸があいとあつさりと・・・」

ミツル「残る敵はあの骸骨か・・・」

ミツルはガラダK7を見つめる、そしてマジンガーZをガラダK7に向かつて直進して動かせる。

ガラダK7「グオオオ！！」

ガラダK7は一本の鎌の角をマジンガーZに向かつて遠投し直撃したが、マジンガーZにはなんの傷もない。

ミツル「これで最後だ、ルストオ、ハリケエエエエエエン  
！！」

マジンガーZの口のスリットから強酸の入った強風が出された、ガラダK7は回避する暇もなく、ルストハリケーンに呑まれて装甲が錆びつかされ、果てる。

ミツル「どうだ、これがマジンガ - の力だ！」

AEU大尉「くそつ撤退する！！」

AEU大尉は戦闘機に乗りすぐさま撤退しようとする。

ロックオン「おっと、最後はいいとこどりで狙い撃つぜ。」

デュナメスのビームランチャーでAEU大尉の戦闘機は大破する。  
ティエリア（マジンガーZ、何故これ程の戦闘力を有しながらウルダはマジンガーZの相続を許したのか・・・あの機体にかなりの秘密があるのだろうか・・・）

しかしこの戦闘がマジンガーZの名声を上げることにならうとせ、パイロットのミシルも知る由もなかつた。

**第三話 機械獣（後書き）**

次回「Zの評価」

## 第四話 Nの評価

AEU本部

AEU上層部達はエレガ大佐の偽情報による光子力研究所襲撃の映像を眺めていた。

ガンダムを圧倒する機械獣達、そしてマジンガーZに圧倒される機械獣達、これから戦況において見誤る所が多いと考えた。

上層部A「マジンガーZ、あの機体の火力はけた違いですな。」

上層部B「今のところマジンガーZのわかつてている武装はマッハ9のジエット噴射のパンチ、『ロケットパンチ』、

一五〇〇〇度の熱光線を発射する『ブレストファイヤー』、強酸の入った強風を出す『ルストハリケーン』、どれも凶悪な兵器ばかりです。」

上層部C「しかしマジンガーZは今のところ空中戦はまだ未知数の戦闘力、空中戦のMSを大量にマジンガーZに攻撃させれば落ちるのでは？」

上層部A「確かに、空中のMSを使えば、マジンガーZを倒すことはできまじょうな。しかし『CB』と協力関係であるにも関わらず、未知のエネルギーである光子力を研究している光子力研究所を潰すにはなかなかもつたいない、ここはまだマジンガーZの攻略については干渉するべきではないのでは？」

ざわざわ・・・・とAEU本部の会議室から雑音が流れる。

上層部A「では結論を言います。我々は半年まで光子力研究所には干渉しない、そして密かにマジンガーノの攻略を建てる。意義はありますか？」

上層部達「まあ、いいでしような・・・（警戒すべきなのはCBなんだし）」

こうして光子力研究所は救われた。いやAEUの上層部軽つ！！！といふか適當だ・・・「CB」が変革する気持ちも分かるかもしれない。

日本

士官学校

ボス「聞いたか兜！？謎の機体の噂！？」

ミツル「ああ聞いたよ、凄い強さだつたな。」

ボス「だろお～？やつぱりビームサーベルやビームライフルみたいなしそっぽい道具や弱っつい装甲よりもパワーあふれる攻撃に、どんな攻撃もきかない装甲のほうがイカスんだよー！」

ボス・・・君は全てのMS乗りを敵にしてしまった。

別世界で

A・R「成程……君はそういう偏見だったのか……」

K・B「そんな偏見修正してやる……」

Z・A「あなたの偏見なんて知ったことか……」

U・E「おかしいですよ、ボスさん……」

ボス「す……すすすすんません歴代ガンダムパイロットの偉人達……！」

そして今世界に戻る。

ミツル「それよりも今日光子力研究所に行こうと思つんだ。ボスも行くかい？」

ボス「おうーあの黒い機体には興味があるからな、行かねえほうがおかしいってもん「行かないほうがいいわよ」だ・・・誰でい！？」

ボスとミツルは顔を後方に向かせた。そこには士官学校の女子生徒がいた。ボスの会話に勝手に入り込んだ女性は「かおり・弓」という名前だった。

かおり「ボスと言つたわねこのデブの人。」

ボス「えちょ、かおりちゃん、デブとかちよつと酷いんじゃないかな？」

かおり「つるさいわ。貴方にはデブがお似合いよ。」

ボス「そ、そんな……かおりちゃんが俺様のことをそんなに思つてたなんて……」

かおり「いいえ、貴方の事なんて全く思わなかつたわよ。」

ボス「ですよねー。」

ミツル「おい！お前ボスに少し言いすぎなんじゃないのか…？」

かおり「あら、貴方は…・・ちょうどいいわ、貴方ちょっと付き合  
いなさい。」

ミツル「はあ？」

ボス「か・・・・・兜オ！まさかお前・・・・・」

ミツル「いや初対面だし、深い関係なつた覚えはねえよ・・・・・

かおり「そういう事、じゃあ行きましょ。」

ミツルとかおりは教室を後にした。

士官学校裏口

かおり「ここなら誰もいないわね。」

ミツル「なあ、アンタいつたい何をするつもりなんだ？」

かおり「・・・・・单刀直入に言つわ。貴方マジンガーノを降りなさ  
い。」

ミツル「な、アンタマジンガーノの事しつてるのか…？」

かおり「当り前よ、私は『教授の娘よ。知らないはずがないじゃない。』」

ミツル「だがマジンガーンは降りねえ、あいつはおじいちゃんが造った無敵の鉄の城だからだ！」

かおり「そう・・・いまさら後悔しても遅いわよ。確かにマジンガーンは最強、だけど弱点は多々ある。貴方にそれがわかるかしらね。」

「

ミツル（なんだ・・・）の女、マジンガーンを数年前から知っているようだ。一体何者・・・？）

「グーグーッ！－テロリスト襲撃、テロリスト襲撃、生徒たちは避難してください。」

ミツル「な・・・」

かおり「テロリストの襲撃ですって！？」

日本 東京

沙慈・クロスロードヒルイス・アレヴィイはマジンガーンのニュースを見ていた。ガンダムでも勝てなかつた機械獣軍団を、マジンガーンが簡単に撃退したこと驚いていた。

沙慈「ここまで化け物じみたMSがあるなんて・・・。」

ルイス「すごい・・・手が飛び出てる・・・」

沙慈「光子力研究所、興味があるな。ルイス、僕は光子力研究所に行く。謎のエネルギー 光子力に今日 を持つた。」

ルイス「ちょっと沙慈、学校はどうするのよー。」

沙慈「何だつていい、光子力を勉強するチャンスだーー！」

沙慈は光子力研究所に行くことを決意した。しかし彼もまだ知らないかった。自分の内なる力に。

続く

第四話 Nの評価（後書き）

次回「光子力ビーム」

## 第五話 光子力ビーム

光子力研究所

教授室にミツル、『親子、レンがいる。教授室のモニターにテロリスト達の映像が映る。もつすぐ彼らは町につくようだ。

』「ミツル君、わかっていると思うが町の海にテロリストがここに来つつある。」

ミツル「わかっています。」

レン「でも可笑しいな、なんでよりもよって光子力研究所ばかり狙うんだろ?」

かおり「レン君の言う通りよ。でもねレン君、今日日本でテロ活動を行っているテロリストによつて光子力研究所は拠点としても十分だし、光子力エネルギーを悪用されたら世界を簡単に掌握できるの。それにテロリストは今少なくとも高性能のMSと互角に戦える機械獣を購入しているらしいわ。ここを占拠できる可能性も高くなつた。最も機械獣を製作している人物はわからないけど。」

ミツル「よく知つてるな。」

かおり「私は昔から情報収集が得意だから。」

ミツル（ますます）この女があやしくなつてきたな。）

弓「C Bは今ヨーランと交戦中だ。だからミツル君、できるだけ時間稼いでくれ。マジンガーの新装備の開発までに。」

ミツル「マジンガーの新装備?」

弓「そう、その名も『ジェットスクランダー』。」

ミツル「ジェットスクランダー・・・」

弓はジェットスクランダーの完成図の紙をミツルに渡した。スクランダーの形状はいかにも大空を飛ぶ赤い翼だった。

弓「君のマジンガーノは確かに最強のスーパー・ロボット、だがマジンガーノは飛行能力がない。よつてそれを補うために造られた飛行マシンだ。当然超合金ノを使用している。」

ミツル「しかし、よく短期間で製造できましたね。」

弓「マジンガーノの力だよ。自己再生と自己修復を備えて予定以上に早くできそ�だつた。」

レン「弓教授、敵の勢力はどれくらいなの?」

弓「そうか、まだ話していなかつたな。飛行専用MS150機、陸戦MS100機、タロス神像100機だ。機械獣は1体位いると予測できる。」

かおり「350機、ガンダムですかなうかどうか・・・

ミツル「わかりました弓教授。」

『「しかし無理はするな、危なかつたら、すぐ引き上げても構わない。』

ミツル「はい、マジンガーZ、そしてミツル・兜、出撃します。」

ミツルは教授室を走つて出た。

町

テロリスト「これより町を制圧する。」

テロリストの下つ端「ヒヤツハー！町は消毒だ～！！」

M.S.の出すマシンガンや bazooka が発射されて町は轟音とともに破壊し尽くされてしまう。しかし住民のほとんどはちゃんとテロリスト襲撃に気づき、日本の軍部に保護されている。

テロリストの下つ端「どうやら民衆のほとんどは避難しているようです。」

テロリストのリーダー「まあいい、次は光子力研究所・・・『そろはさせんかテロリスト共～！』何だ！」

ドカドカとM.S.の数倍のスピードでM.S.の大軍の中心にマジンガーゼは走つた。

テロリストの下つ端「リーダー、あれはマジンガーゼです！空に飛びえる正義のスーパー・ロボットと言われています。」

テロリストのリーダー「構う事はない！」たちには300の大軍、

そして敵はたかが一機、数で押せばどうこういとはない……

そうテロリストのリーダーの言つ通りである。300・1では誰もがこつちが勝つたも同然というだらう。

しかしそれは敵が『リアルロボット』だったならばの話である。

テロリストの下つ端×30『ヒヤッハー！マジンガーナは消毒だー！！』

テロリストの下つ端の駆る陸戦MSはマシンガンやらバズーカを発射させた。しかしマジンガーナはそれらをよくよけている。

ミツル「いぐぞテロリスト共、ブレストファイヤーーーー！」

マジンガーナの胸部に15万度の巨大な高熱光線が瞬時に発射される。当然テロリストの下つ端のMS30機は溶解された。テロリスト達は恐怖のあまりMSを動かせなくなっている。

テロリストのリーダー「ひるむな！所詮は一機だ！数で押せ！押しまくれ！！」

テロリストのリーダーは作戦もなしに味方を指示する。

テロリスト「とにかくなるべく長距離に持ち込め！」

空戦MSのビームライフルの数百の銃撃がマジンガーナに襲いかかつたが、マジンガーナには何の支障もない。それどころか、ビーム

ライフルの銃撃の3割は確実によけていた。

ミツル「ルストハリケーン！！」

マジンガーZの口のスリットから酸の入った強風が出される。空戦MSの8割は強風に巻き込まれ、装甲などを抜かされ空中の一部となってしまった。

テロリストのリーダー「かかつたな。」

とテロリストのリーダーは誇らしげに笑つた。

テロリストのリーダー「タロス神像、地面から出てこい、マジンガーZを抑えつけろ！！」

ミツルは下の道路を見てみるとタロス神像が素早く地面から出できて、マジンガーZを抑えつけた。

ミツル「くそ、放せ、放せよお！」

タロス神像100機の抑えつけによりマジンガーZはびくともしない。

タロス神像は容赦なく攻撃し、ホバーバイルダーのガラスを容赦なくヒビを割らせる。

ミツル「くそつ、ここまでかよ！－マジンガーアアアア－！」

ミツルは死を覚悟した。今マジンガーZは身動きは取れず、さらにタロス神像の鉄拳が今間近に近づいている。もう絶体絶命だ。

そんな時だった。

- - - M A Z I N P O W E R 発動 - -

光が輝いた。マジンガーノが金色の光を輝かせてマジンガーノを押さえつけているタロス神像を発光だけで粉々にしていった。その光はまさに神の放つ威光だった。

テロリストのリーダー「な・・何が起こった?」

マジンガーノは半径1kmの地帯を地面だけにした。よく見ているとマジンガーノの頭部のホバー・パイルダーの超強化ガラスが元に戻っている。

- - - つつく見てらんねえよ - - -

ミツルは突然声を聞いた。マジンガーノがしゃべった?いやそんなはずはありえない。いくらマジンガーノといえどもロボットが自我を保つてしゃべらない訳がない。しかしミツルは声が聞こえた。その声の主はマジンガーノだった。

- - - おい、相棒、だまつてりやあ随分と調子に乗りすぎじゃねえの、ええおい、お前の操縦は武器に頼りすぎなんだよ、もうちつと拳を使え。あとビームライフルの弾幕をよけれるようにしろよ。

ミツル「マジンガーノがしゃべってる・・・」

…………嫌いやべつてるわけじゃないんだが……まあお前と特定の人物にしか聞こえないちょっととしたテレパシーみたいなもんだ。

すげえ。ミツルは思った。超兵器を持ち合わせた力、そして心をもったロボット、歴史上そんな機体は存在するはずがなかつた。

…………俺がしゃべつたからちょっと混乱しているのか、おつと相棒、敵さんの機械獣が目の前に居るぜ。

ミツル「あ、本當だ、いつのまに・・」

テロリストが購入した機械獣ストロンガーティー4が、マジンガーニの前に立ちふさがつていた。

テロリストのリーダー「行け、ストロンガーティー4、マジンガーニを叩き潰せ！」

ストロンガーティー4「グオオオオオオオオ！」

ストロンガーティー4は腹の巨大な腹車を回転させ、ルストハリケーンに匹敵する強風を起こす。

ミツル「ならばこちらも、ルストハリケーン！！」

勝負は一瞬でついた。マジンガーニが今までのマジンガーニのルストハリケーンの段違いのルストハリケーンを出しストロンガーティー4を0・1秒で消滅させた。

テロリストのリーダー「な・・・なんだその力は！？」

テロリストのリーダーは驚愕している。

ミツル「ああ、お前の仲間は全員いなくなつた、もう降参しやがれ  
るわ、そう思つていた。」

ミツルは勝ちを宣言した。もうあいつも自分の手札をわしきつただ  
らう、そつ思つていた。

テロリストのリーダー「・・ふ・・ふふ・ふはははははは  
はははこれで勝つた氣か！？」

ミツル「何ー？」

テロリストのリーダー「もうお前たちの負けだあ、なぜなら我々は  
只の駒にすぎないのだから！」

ミツル「どうこいつ」とだー？」

テロリストのリーダー「上を見ろ！ あそこにはでかい機械獸があるだ  
らう？」

ミツルは上空を見ると通常の戦艦並みの大きさの青い機械獸がいた。

テロリストのリーダー「あいつはグロイザーメー10、あいつが急降  
下した時、光子力研究所もろとも一つの県が滅ぶくらいの爆弾が爆  
発されるー！」

ミツル「何ー？」

テロリストのリーダー「あと2分だ、もう何もかもおしまいだ！！」

ミツル「へんつー..だいすけはここー? ブレストファイヤーなりませ  
んとか..」

- - - - 相棒、光子力ビームを使え！！ - - -

## ミツル「光子力ビーム?」

- - - まず真ん中のダイヤルを右に回せ！ - - -

ミツル「よし、まわした。」

- - - 次は狙いを定める！ - - -

ミツル「目標、グロイザーX10！」

ミツル 黄色、オレンジ、濃いオレンジ、赤

三一七  
「勿以惡小而爲無害，勿以善小而爲無益。」

全てを無に帰す神の閃光、

その名も！

その名も！

その名も！

ミツル「光子力つビイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイム！」  
!!!!」

マジンガーZの目から巨大な金色のビーム砲が発射された。それは淀んだ雲を切断しグロイザーメリオンに直撃する。

ミツル「フルパワーだああああああああ！」

マジンガーZはさらに威力を上げ、グロイザーメテオをはるか上空へ持ち上げる。そしてそれは地球圏外に入り、宇宙のなかで爆発した。

ミツル「おじいちゃん、マジンガーは本当に無敵なんだね。」

こうして町の戦闘は終わった。マジンガーナの強さもまた世界をどうかすことになる。

続  
<

## 第五話 光子カビーム（後書き）

次回「BEAST」

感想などがあつたら書いてください。

BEAST編開始 第六話 BEAST（前書き）

作者「〇〇の本編を無視してオリジナルテロリストを造り文才もなしに武防備で小説を書く私の姿はお笑いだつたぜ。」

マジンガーノの敵はもはや一人もおらん、地球上のテロリストを葬り去り、英雄になつてしまえ。」

マジンガーゾ

それは西暦2307年に突如現れた謎のスーパーロボット。

マジンガーゾ

それは神にも悪魔にもなれる力

マジンガーゾ

それは光子力エネルギーの塊

A E U

アナウンス「続いてのニュースです。日本の静岡県熱海市でまたテロリストが襲撃を実行しましたが、謎のMS、マジンガーゾによつて撃退されました。映像を流します。」

テレビ画面の映像にマジンガーゾがテロリスト相手に猛威をふるつている姿が映し出された。鉄壁の超合金ゾのほかにルストハリケーン、ブレストファイヤー、光子力ビーム、マジンパワー、どれも前代未聞の武器が民衆や軍人にそれらを目に焼きつかせる。

それを見たパトリック・コーラサーは

「コーラさん、すげえ・・・あれならガンダムでも敵じゃあねえ。あ

の時の雪辱を晴らせるかもしけねえ。」

AEU隊員「しかしコーラ隊長、確かに恐ろしいパワーですが飛行能力があります。」

「コーラさん」「わかつてねえなお前、確かにマジンガーは飛行能力がない。だが光子力研究所は密かにマジンガーノ専用の飛行武器を造つてゐるって噂だ。」

AEU隊員「本当でありますか！？だとしたらマジンガーノは・・・」

「コーラさん」「ああ、あの機体はどんどん強くなる。二大国家の全てのMSの数の戦闘能力に匹敵するちからをな。一度でもいいからマジンガーノを動かせたいぜ。」

パトリック・コーラサワーはマジンガーノに憧れを抱くようになってしまった。AEUの軍人たちはあのプライドの高い「コーラサワー」を魅了させるマジンガーノにすこさを感じたのである。

光子力研究所

ミツル「『神か悪魔か、驚異のマジンガーノ』、『人類の超兵器！？』すげえ・・・マジンガーノがこんなにも有名になるなんて・・・」

「

ミツルは今日の朝新聞を読んでいた。昨日のテロリスト襲撃からマジンガーノの勇猛さは世界にとどろいていた。パイロットのミツルは奮えが止まらなかつた。世界中で有名になったからうれしいわけではない。ミツルの祖父、長十郎・兜が造り上げたマジンガーノが

ガンダム以上の評価を得、おじいちゃんの有能さが世界に注目されたからである。

弓「だがあうぬぼれてはいけない。これからもテロリストは紛争を続けるだろ？ そして機械獣も強さを位ましてマジンガーナに挑んでくる。油断はするな、平和を守れ。マジンガーナは世界の平和のために造られたもの。ジェットスクランダーも完成したことだ。ミツル君、ジェットスクランダーのテストをしてみよう。」

ミツル「お、漸くきましたね。よし、いっちょやつてします！！」

光子力研究所外にはでかいプールと言つていよい水場がある。そこの下にマジンガーナを収納してある今そのプールの水が真つ一本に裂き、マジンガーナが姿を現す。ただ違うのはマジンガーナの背中にジェットスクランダーが合体してあるところである。

ミツル「パイルダアアオオオオオン！！」

ミツルはマジンガーナにトッキングし、マジンガーナの目が光る。  
そして・・・

ミツル「スクランダアアウイニング！！」

その叫びとともにマジンガーナは上空を飛んだ。飛行能力も重ね備えたマジンガーナは敵はいないかのようなさっぱりした顔で飛んでいた。

ミツル「はええ、こいつは速い！！少し体が痛いが、別に大したこ

とはねえ、行くぜ！東京までひとつ飛び・・・

しかしマジンガーゾのモニターから弓教授の顔が浮かんできた。

弓『待つんだミツル君、マジンガーゾが東京に出でてしまつたらいろんな意味で大惨事になりかねない。だが熱海までは許容しよう。あそこなら民衆はマジンガーゾをよく知つてゐるからな。』

ミツル「わかりました、熱海までですね。行くぜエー！マジンゴー！」

マッハ9のスピードのマジンガーゾは熱海を駆け抜けていった。

弓『全く・・・やんちゃな所は兜博士によく似てゐる。「続いてのニュースです。」ん？』

突然テレビのアナウンスからニュースが入った。

アナウンス「今朝午前二時にユニオン、AEU、人革連の管轄基地一つずつが謎のテロリスト「BEAST」によつて制圧されました。」

弓「何？」

アナウンス「BEASTは民間人や戦争で降伏した人間をも虐殺し、自分たちは破壊を楽しむ獸たちだ、と「BEAST」の被害者の人がそう証言していました。」

弓「BEAST、か。マジンガーゾがいよいよいかる？といづれできてしまう組織だつた。ミツル君にもBEASTの討伐に専念せざるをえないな。」

？？？

そこは元ヨニオンの管轄基地、しかし今は謎のテロリスト「BEAST」の本拠地の一つ、

「？」、「よく来た諸君。」

諸君とは世界中で紛争を続けていたテロリスト達であった。

グロトネリア「私の名前はグロトネリア、このBEASTのリーダーだ。」

グロトネリアはテロリストたちに自己紹介した。グロトネリア、スペイン語で暴食。

グロトネリア「我々はヨニオン、AEU、人革連を潰し、新たな政治をたてる。悔しくないのか？ヨニオンなどに虐げられ接種された故郷出身の人間たちよ、憎くないのか？勝てそうな戦争を「CB」にめちゃくちゃにされて・・・だから我々テロリストは一つになつた！みよ、この機械獣とMS軍団を。」

グロトネリアの後ろには数万のMSと数百の大型機械獣がずらりと並んであつた。

グロトネリア「これだけの兵力なら数年でAEUあたりを潰すことも不可能ではない。さあ、賽は投げられた！！今こそ戦え、BEAST（獣たちよ！）」

世界中のトロリスト達「いつもおおきなおもちゃをもつてお出でなさい。」

かくして世界中のトロリスト達はBEAVERとして活動をするようになります。

続く

**B E A S T 編開始 第六話 B E A S T (後書き)**

七話「ミツル・兜V S B E A S T」

B E A S T 編が終了したら別のガンダムOOの一次創作とコラボし  
ようかなと思っている愚かな私でござります。

## 第七話 ミヅル・兜ＶＳBEAST 前哨戦

沙慈・クロスロードは熱海市に漸くついた。光子力の研究のために光子力研究所を訪れようとしたが友人ルイスに何度も止められた。しかし、深夜の夜、なんとか搔い潜つて東京駅につき、今に至ったというわけである。

沙慈「ここが熱海か・・・海が綺麗だな。」

沙慈は光子力研究所にいく前として、熱海を観光しに行つている。

沙慈が店に入ると奇妙な土産を見かける。

「マジンガー饅頭」

マジンガーノの顔の饅頭が置いてあつた。

沙慈「数日にしてマジンガーノの人気が上がるなんてな、英雄として扱われている。ガンダムみたいに戦争を根絶する力があるのか・・・」

沙慈はマジンガー饅頭を一セット購入し、店を出る。

そして、沙慈は上空から、マジンガーノが飛んでいるのを見かけた。

沙慈「マジンガーノ！生で見たけどやっぱ浪漫を感じるな・・・。」

「

マジンガーノはジェットスクランダーで飛行していた。熱海の町をひとつ飛びしていった。当然民衆の目に入つており、「マジンガーノだ。」

「すげえ空飛んでる」などと驚愕の声があがる。

B E A S T の前衛隊は光子力研究所の襲撃を依頼された。

なんでもB E A S T のリーダー、グロトニアに光子力研究所のマジンガーンの力量をデータに収めるという話である。

えちょ WWWマジンガーンとガチでやるってないわー WWWと思つてはいけない。B E A S T の行動隊長とその部下達は数年前に開発されたボロ戦艦に乗つっていた。その戦艦はカモフラージュで他の住人には見えないようになつている。

B E A S T 行動隊長「兎に角ボロ戦艦で出撃している俺たちはマジンガーンに勝てる確率はない。なので機械獣を使用しデータを獲る。機械獣トロスロフとゴーストファイヤーV9で。」

ぼろ戦艦の格納庫に巨大な角を備えた四本脚型機械獣トロスロフと両腕に鎖と鉄球に、頭部に炎を備えた機械獣ゴーストファイヤーV9の姿があつた。

ミツル・兜とマジンガーンは熱海を飛翔した後、通信が入つたので光子力研究所に戻つた。何でも敵が熱海市に潜入したらしい。あのぼろ戦艦はたとえ相手が見えなくても敵機に察知できるようになっているのだ。

そのぼろ戦艦は、ついに光子力研究所までたどりついてしまつた。

B E A S T 行動隊長「よし、機械獣を投下しろ！」

ぼう戦艦は空からトロスロフヒーストファイヤーヴを投下する。

ミツル・兜「機械獣2体か。タロス神像で相手を消耗させないのか？」

言ひや否やトロスロフはマジンガーZに向けて突進してきた。

ミツル「突進してきた！？ブレストファイヤー！」

マジンガーZは胸板でブレストファイヤーを発射する。しかしトロスロフには全く効かなかった。

ミツル「何！？」

トロスロフはマジンガーをここそのまま激突し、頭の角でマジンガーネの腹の超合金Zを貫いた。

ミツル「な、超合金Zが！？」

トロスロフの角には超合金Zをも貫く破壊力がある。そしてその角は光子力ビーク以外のマジンガーZの武器を無効にするバリアみたいなものを備わっている。

ミツル「くそつーこんなマジンガーZのパワーで・・・」

ミツルはマジンガーZでトロスロフの角を折ろうとしたが、ゴーストファイヤーヴの鎖でマジンガーZは縛られてしまつ。

-----何やつてんだ相棒！マジンパワーを機動しろ！-----

ミツル「わかつてゐる！マジンパワー機動！」

MANZIN POWER 機動

いざマジンパワーを機動すると、トロスロフは消滅し、ゴーストファイヤーV9の鎖をも消滅させる。

BEAST行動隊長「さすがはマジンガーニか・・・だが少なからずデータを集めた。ゴーストファイヤーV9、後は任せたぞ。」

BEASTの行動隊長達がのるぼろ戦艦は撤退していく。

ミツル「何だつたんだろうか？まあいか、ルストハリケーン！」マジンガーZはルストハリケーンを出し、ゴーストファイヤーV9を倒す。

目の前の敵はいなくなつた。

BEAST基地 本部

BEAST行動隊長「ただ今帰還いたしました。」

グロトニア「よし、報告を聞こう。」

BEAST行動隊長は部屋にあるモニターでマジンガーニの戦闘データを解析する。

グロトニア「ちょ wwwうわ wwwトロスロフで穴開けてもマジンパワーで即回復とかないわ www。」

BEAST行動隊長「では全戦力を光子力研究所に回しますか？エ

ネルギー切れになつたら一機にたたくといつのは？」

グロトニア「わーつてるよ、今回は様子見だけどさ、次からは光子力研究所を本格的に襲う、だがその前に・・・」

B E A S T 行動隊長「その前に・・・何でしようか?」

グロトニア「全軍出撃だ。目標はA E U 本部だ。」

続く

第七話 ニヅル・兜VSBEAST前哨戦（後書き）

次回「超合金Zを渡せ！？」

超合意金へを渡せーー? (前書き)

グラハムさんが出でるもす。

## 超合金「を渡せ！？」

ミツル・兜はバスを連れて光子力研究所に向かっていた。ミツルは悪友であるボスだけは自分がマジンガーZのパイロットであることを見抜いた。ボスはミツルの正体を知った時、驚愕と疑問に包まれていた。

ボスは「兜あ、本当にお前はマジンガーZのパイロットなのか？」と聞くとミツルは「何なら行くか？光子力研究所に。」と士官学校の授業が終わつた後ボスを光子力研究所に連れて行つたのだ。

そして今に至る。

静岡県熱海市の山の森林に光子力研究所は立つていた。ボスとミツルは100m先からそれを直視している。

ボス「ひええええ、これほど規模がでつかいとはなあ・・・」

ミツル「光子力研究所は最重要機密だからな。テロリスト以外は手を出さないようになつていて。」

ボス「兜あ、そういうえば光子力つて謎のエネルギーだけど一体その実態は何なんだ？」

ミツル「光子力は富士山の地下からとれるジャパニウム鉱石からでるエネルギーだ。昨日」「教授の解析で分かつた。

ボス「富士山からとれるねえ・・・だったらAEHやコニオンに利用されちまうんじゃねえか？」

コニオンやAEHは世界三大国家のひとつである。だがその独裁政治が世界を牛耳り、CBやBEASTみたいなテロリストを造つて

しまった。光子力研究所もC Bの協力者であるが武力介入はせず、ただC Bに資金を送つていいだけにすぎない。むしろ世界平和のために超合金Zと光子力の研究をしているのだ。

ただ戦争にいかず誰からも恨まれず、光子力研究所は日々を送つてきたのだ。

ミツル「確かにバスの言つ通りいつの日かA E Hやユニオンに利用される可能性は高い。だがそんなことはさせねえさ。俺とマジンガーZがいる限り！」

「ツツツツツと、道路から足音が聞こえる。  
？？？「成程、すごい正義感を持つていいな。マジンガーZの操縦者君。」

ボス「ゆ・・・ユニオンの軍人じゃねえか！？」

？？？「よく知つてているではないか太っちょの少年。そう、私はれつきとしたユニオンの軍人である。」

ミツル「俺はミツル・兜と言います。あの・・・貴方は？」

グラハム「あえて言おう、私はグラハム・エーカーであると。」

光子力研究所 教授室

弓「成程・・・ユニオンの上層部はそんなことを言つていたのか。しかしいくらなんでも軽すぎやしないかね？」

弓教授は白人男性と黒人男性のユニオンの軍人、ハワード・メイス

ンとダリル・ダッジと交渉?をしていた。

ハワード「確かに光子力研究所は表向きには世界平和のために光子力を研究しております。しかしながらGN以上のエネルギーを放つ光子力は戦争の火種になる恐れがあります。」

ダリル「もちろん教授が例のものをお渡しすれば我々は何の危害も加えることもなく光子力の研究を」自由に続行できます。」

弓「マジンガーンの超合金Zが目当てだつたとはな、てっきり私はマジンガーンや光子力と思っていたのだが・・・だが私の一存では決められない、この研究所の最終決定権はマジンガーンのミツル・兜君にゆだねられている。超合金Zの譲渡は彼の許可を得てからだ。」

「

光子力研究所 入口

ミツル「超合金Zを渡せ!-?」

グラハム「そう、それ以外にはなにもいらない。」

ボス「でもそれってマジンガーンを寄越せといつてるようなもんじやねえのか!-?」

ミツル「いや、マジンガーンの超合金Zをデータにかなりの量の超合金Zを生産している。おそらくグラハム中尉、あなたはこれをしつて・・・」

グラハム「いや、我々も1時間前にそれを見た。安心したまえ。別にマジンガーンを奪うわけではない。数量の超合金Zをあげるだけ

でいい。そのためにはミツル・兜君、君の一存が必要だ。頼む。」

ミツル「わかりました。超合金Ζをお渡します。でもひとつ理由をお聞かせください。」

グラハム「何だね？」

ミツル「超合金Ζをどう使うつもりなんですか？」

グラハム「これは極秘事項なのが・・・仕方がない君たちに特別に教えてあげよう。私の搭乗機であるフラッグを強化するためだ。そしてガンダムに勝つ！それだけだ。」

ミツル「・・・そうですか・・・」

グラハム「しかし超合金Ζの護送はテロリストの大いなる餌でもある。そうしたら戦争の火種になりかねない。そしてミツル君、君にはユニオンまで超合金Ζを護送してもらいたい。勿論タダとはいわない。光子力研究所にはかなりの資金を投入しよう。」

ミツル「わかりました。護送は任せください！」

グラハム「それは頼もしいな！ミツル・兜君！」

ボス「おっと、待ちな。兜、お前だけはいいカッコはさせねえぜ。グラハムさんよ、俺も連れてってくれねえか？」

ミツル「ボス！？」

グラハム「しかし君は一般人だ。軍人として君に危害を加えるわけ

には・・・

ボス「大丈夫だよグラハムさんよ、この俺は士官学校でも結構鍛えてんだ、体力の自信はあるぜ。」

グラハム「・・・わかった。君の願いを聞こう。」

1時間後光子力研究所 地下室

ミツル、グラハム、ハワード、ダリル、ボス、そしてユニオン兵十数人は超合金Zの黒い山を見上げていた。世界最強の装甲を作り上げる超合金Zはおよそ200tに及んでいた。

ハワード「何という・・・」

ダリル「すごいな・・・」

グラハム「さて、これ程の超合金Zの量を鉄箱に詰めて護送するのが大変だな。」

ミツル「問題ありませんよですよグラハム中尉。マジンガーのパワーなら数分で終わります。」

グラハム「わかっている、そろそろ護送空船が来るころだ。皆、準備をしていけ。」

ミツル・ハワード・ダリル・ボス・ユニオン兵「はい！－！－（おづ）！」

かくして超合金Ζをユーハンまで死守するためミツルは奇妙なMSと戦うことになるのである。

続く

超合金』を渡せー!?(後書き)  
(あき)

次回「マジンガーナンセンス」(ちょっとしたタイトル詐欺)  
」

# マジンガーZ VS C.B（ちょっとしたタイトル詐欺）（前書き）

決してC.Bとは戦いません。

## マジンガーZ VS C.B.(ちょっとしたタイトル詐欺)

### マジンガーSIDE

ミツル・兜がユニオンの軍隊と同行し、超合金Zを運送している。その知らせはC.B.のメンバーにも知らされていた。

ウェーダの中でも危険度レベル7以上に該当する超合金Zと光子力、C.B.のガンダムマイスター達は協力関係だから光子力研究所を無視してきた。しかし流石に世界平和の為光子力を研究しているとはいえ、敵の勢力に超合金Zという最硬の武器を運搬していると言うことは、C.B.にとつても我慢極まりないことだった。別に光子力研究所が裏切ったわけでもない。C.B.の最高幹部イオリアの計画にとても衝動が起こる超合金Zの運送を止めるため、C.B.のメンバーは動き出す。

### 太平洋

ユニオンの戦艦ミツル・兜はユニオンの戦艦の左方にマジンガーゼン、エーカー中尉、応答を。

グラハム「こちらエーカー、こちらも何も害はなし、本艦、応答を。

ビームライフルです！」

ミツル「まことに！」

ミツルはすぐさまマジンガーノの機動力で戦艦の前方に向かい、30kmも離れているMSの撃つたスナイパーライフルを受け止める。そのおかげで戦艦は無傷。マジンガーノにそれなりの損傷は与えたが、戦闘は余裕で続行可能のダメージだった。

ユニーク「あれほどの高威力のライフルを正面で受け止め、あまつさえ大したダメージも受けていないとは。」

ハワード「マジンガーノは本当にこの時代に存在する機体なのか？」

マジンガーノの堅牢さを見て驚いている。無理もない。マジンガーノの活躍は今のところ静岡県熱海市にしかない。だから世界では映像しかわかつていな。だからユニークの軍人の彼らにとつてマジンガーノの活躍を見るのは初めてだろう。

ミツル「まことに！敵がきた！前方約30kmあたりか、マジンガーノ、解析を頼む！」

マジンガーノは前方30kmの映像をパイルダーにいるのミツルに見せる。

ミツル「なー？あれってーー！」

そう、まぎれもなくあの機体だった。緑の装甲を覆うガンダム、ガンダムキュリオスの姿だった。

## ガンダムSIDE

ロックオン「なんつー堅牢さだよつたぐ。」

ガンダムマイスターのロックオン・ストライスは自分の射撃が通用していなかつたことに少し驚愕していた。  
そこへフトレマイオスの艦長 スメラギ・李・ノリエガから通信がかかる。

スマラギ「ロックオン、射撃はもう結構よ。別の任務が入つたわ。今東北10kmから超合金Ζの運送を情報を入手したBEASTの軍隊が今そつちに向かつてゐるわ。」

ロックオンは少し苦虫を噛み、

ロックオン「了解。ロックオンストライス、BEASTを狙い撃つ！」

刹那・F・セイエイ、ティエリア・アーデ、アレルヤはBEASTの機械獣軍団と交戦している。BEASTの機械獣軍団とは今まで2・3回交戦しており、マジンガーΖが初めて機械獣を倒した時に不意をつかれ撃墜されそうになつたが、少し改良を重ねてガンダム達の連携攻撃により機械獣を追討することは容易になり、総計6体ほどの機械獣を撃破した。しかし今回は水中戦なので、苦戦は必須。そして機械獣は水中戦を得意とするグロッカスX10であり、ブレストファイヤーに匹敵する超高熱ビームでガンダムを追い詰めている。

アレルヤ「まずいね。エネルギーがもう少ない。任務は失敗かな?」

ティエリア「何を言つてはいる、アレルヤ・ハプティズム。ガンダムマイスターに敗北は許されない。」

刹那「確かにあの機械獸は水中戦を得意とし、尚且つ間合いも通じない非常に厄介な敵だ。だがあの熱光線ビームはGNフィールドで防御できる。つまり……。」

アレルヤ「圈役が必要となるわけだね。」

ティエリア「その役目は僕がしよう。ヴァーチュの装甲ならばあの機械獸のビームにたえられる確率は充分ある。」

アレルヤ「よし、頼むよティエリア。」

刹那「エクシア、目標を駆逐する。」

作戦は決行した。

まずヴァーチュでキングタンX2に真正面から向かい、熱光線ビームを受けるもののGNフィールドで防御し、キングタンX2に抱きつく。グロッカスX10は頭部にある鎌でヴァーチュから抜け出そうとするもののヴァーチュは動じない。

そのままにエクシアがGNソードでグロッカスX10を何本も突き刺し、グロッカスX10は機能を停止し、爆発する。ヴァーチュはエクシアがグロッカスX10にGNソードを刺している最中に手を離し、離脱した。

アレルヤエ・・・・。

刹那「任務完了した。これより・・・。」

アレルヤ「待て！敵機がこちらに向かってる…？あれは…戦艦なのか！？」

アレルヤが視認した戦艦の名は海底要塞サルード。その名の通り水中戦用戦艦である。

### サルードの司令部

エレガ「さすがはCBのガンダム、グロッカスX10を倒すとは、だが…少し油断したな。グロッカスは1体だけだと思うなよ！」

サルードの頭部から大量のグロッカスX10が出現した。その数30。

3VS30これは絶望的な差だった。

アレルヤ「二人とも！撤退しよう！」

エレガ「やらせると思つか？」

エレガは機械獣を操る杖でグロッカスX10を指示し、グロッカスX10はガンダム達を囮んだ。

いかに機動性の高いガンダム達でも、水中ではキングタンX10の

機動力にはるかに劣つていた。

エレガ「さあ行け！ キングタン×キングタン×キングタン×10よ！ ガンダム達を血祭りにあげろ！」

キングタン×10達の熱光線ビームがガンダム達を襲う。だがそこに救世主が現れた！。

ミツル「ブレストファイヤー！」

後方からキングタン×10の2体がブレストファイヤーによって溶解される。

キングタン達も「何があった！？」と思ふ攻撃を中止する。

救世主は鉄の城、マジンガーナーであった。

ティエリア「あれは！？」

刹那「マジンガーナー、来ててくれたか。」

マジンガーはすぐさまその機動力でエクシア達の救助に向かう。

そしてマジンガーナーはエクシア達を腕で掴み水中から脱出しようとすると、

エレガ「逃がすなキングタン達よ！ 魔雷でマジンガーナーの動きを止めろ！」

キングタン達は腹にある魚雷でマジンガーネの動きを止めようとしたが、ガンダム達がGNフィールドを展開して、損傷は最小限に抑えられた。

エレガ大佐「くそっ逃がしたか！」

マジンガーネは水中から空中へと向かっていく。

続く

## マジンガーナンセンス（ちょっとしたタイトル詐欺）（後書き）

次回・・・の前にちょっとしたプロト作品を近日公開しようつと思想います。

プロト作品 予告　　IS インフィニット・ストライス

魔神皇帝（前）

今回はちょっとした次回作宣伝みたいなもんです。

## プロト作品 予告 IIS インフィニット・ストライス

## 魔神皇帝

IIS「インフィニット・ストライス」。それは女性にしか起動出来ない最強の兵器。その兵器で女性が男性よりもかなり活躍してしまい、気が付くと女尊男卑の時代になってしまった。しかし例外にその兵器を起動できる男性が一人。

一人は織斑おりぬか一夏いちか、第1回モンド・グローリングIIS世界大会総合優勝および格闘部門優勝者である織斑おりぬか千冬の弟である。

そしてもう一人は兜ミツル、光子力エネルギーに選ばれし者であり、この世とは思えない最強のIIS『魔神皇帝』の操縦者である。

『魔神皇帝』の誕生の謎、それはIISの開発者である篠ノ之束しのののたばねと光子力という怪物じみたエネルギーを開発した兜長十郎、この二人の人物の協力から始まった。兜家、織斑家、篠ノ之家は昔からかなり仲が良かつた間柄にあつた。ミツルと一夏は小学校からの友人でありよく遊んだ仲であつた。

長十郎は光子力エネルギーをいづれIISに詰め込もうと画策していた。長十郎は束と相談し束はそれに快く承諾した。

設計とエネルギーの提供は長十郎、IISの部品などは篠ノ之束に任せられた。

### 『魔神皇帝』

IISのコアは光子力エネルギーと束が造りだしたIISのコアを融合

することで完成した。

次はISの装甲だが、兜長十郎が製作したどんな手段を使っても破壊不能である超合金ニュー<sup>ゼットアルファ</sup>Zaで備わっている。

ISのシールドバリヤーは光子カフイールドという光子力を使用したシールドバリヤーを備えている。

絶対防御の機能もある。

IS武器は拳と胸の熱板、肩の剣である。もちろん他の武器もあるが、光子力エネルギーを使用して生産される武器が多い。

では武器を紹介しよう。

### 光子力ビーム

『魔神皇帝』のビーム兵器。光子カフイールドを開きその先から瞬時に放たれる放たれるビーム、50%のパワーを放つても町を一瞬で破壊しかねない一撃必殺のビーム。

### ギガントミサイル

『魔神皇帝』の必殺ミサイル。光子カフイールドを開き、光の粒がミサイルとなることでもできるミサイル兵器。威力はTNT火薬1200トン。

### ターボスマッシューパンチ

『魔神皇帝』の腕の側面にある螺旋状の刃を回転させて発射するロケットパンチ。ISのシールドエネルギーでも防ぐことはできないのは言うまでもない。

## カイザートリガー

『魔神皇帝』の肩から抜かれる二丁拳銃。正確無比かつ必殺の銃撃を敵に見舞う。弾を撃ち尽くしたらグリップ下部に付いている刃を使って手斧として用いる事が出来る。

## カイザーブレード

『魔神皇帝』の肩から抜かれる剣。その切れ味は簡単に重装甲のISを切り裂く程。

## ファイアーブラスター

『魔神皇帝』の胸板から放たれる一五〇〇〇〇度の高熱光線。ISでも一瞬で溶解する。

他にも武器がさまざまあるが武器の説明はこれくらいにしておく。

そして最後に操縦者だ。当然ISには女性しか起動できないので一人は知り合いの織斑 千冬に『魔神皇帝』のテストパイロットを頼んだ。

織斑 千冬は承諾し、早速ISを起動しようとした。

しかしそこでアクシデントが起こる。

なんとISなのに、起動できない。起動できないのだ。

製作者の一人は『まさか失敗した!?』と思つただろう。しかしアクシデントはそれだけじゃない。

数時間後、『魔神皇帝』を地下にしまった後、機体のテストをこなすり見ていた兜 長十郎の孫、兜ミツルはそつと『魔神皇帝』に

さわってしまい、・・・起動させたのだ。

これを見ていた長十郎、束、千冬は驚愕した。女性にしか起動できないISが織斑 一夏を除き初めて起動させてしまったのだ。

まだ中学生のミツルにはまだ自分のやつた重荷が理解できていなかつた。

そして、兜ミツルは高校生になる。運命のイタズラだった。  
友人と織斑 一夏と一緒に女性だらけのIS学園に入学する。

こうして兜ミツルは織斑 一夏と同じく世界で数少ないISを起動できる男として人から尊敬され、誘拐の対象とされるようになる！

ミツル「ターボスマッシュ、シャーアアアアアアアアアンチ！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9592s/>

機動戦士ガンダムOO 魔神Ζ

2011年8月8日15時10分発行